

## 東日本大震災の長期的影響としての子どもの攻撃性に対する 介入プログラムの構築

足立 智 昭<sup>1</sup>  
大橋 良 枝<sup>2</sup>  
柴田 理 瑛<sup>3</sup>  
平野 幹 雄<sup>4</sup>

本研究は、投影性同一化を理論的根拠とし、愛着形成に課題を有する軽度知的障害児は、虐待してきた親を、選ばれた教師に投影し、その選ばれた教師は、虐待した親と同じように振る舞わされてしまうとする臨床モデル（EMADIS）が、保育士に高い攻撃性を示す幼児への介入に適用可能かどうか、またそれが可能ならば、EMADISモデルに基づくアプローチと発達臨床学的アプローチをどのように統合すべきか検討を行うことを目的とした。保育所で得られた3つの事例を分析したところ、家庭で暴力に曝され愛着形成に課題を有する幼児が保育士に示す攻撃性も、EMADISモデルによって説明されることが明らかとなった。また、EMADISモデルの中に、幼児の発達アセスメントや幼児と保育士との愛着水準のアセスメントを行うモジュールをこのモデルに実装するならば、このモデルの臨床的応用性がさらに高まるものと結論された。

Keywords：東日本大震災、幼児、攻撃性、愛着形成、投影性同一化

### I はじめに

東日本大震災から10年が経過する被災地では、幼児、児童が保育士や教師に向ける攻撃性が大きな問題となっている。図1に示すように、全国のデータにおいても小学生の暴力行為が急増しているが、宮城県のデータはそれを大きく上回る数字となっている<sup>1)</sup>。また、柴田<sup>2)</sup>らが実施している宮城県内の保育所、放課後児童クラブへのアウトリーチ活動においても、子どもの暴言・暴力等の攻撃性への対応を問われることが多かった。たとえば、2、3歳の幼児が、保育士に向かって「しね」、「きえろ」、「くそばばあ」などの暴言を吐く事例もあり、これらの暴言を毎日浴びる保育士の傷つきは深く、現場に大きな混乱を生じさせていた。

このような子どもの発達段階にそぐわない暴力

的な言動の背景には、被災地における家族機能の著しい低下が仮定される。なぜなら、足立<sup>3)</sup>は、震災直後から保育所や児童クラブのスーパーバイズを行ってきたが、高い攻撃性を示す子どもの多くは、「震災前に、既に親が離婚しており、生活が一層苦しくなった」、「震災後、親が失業した」、

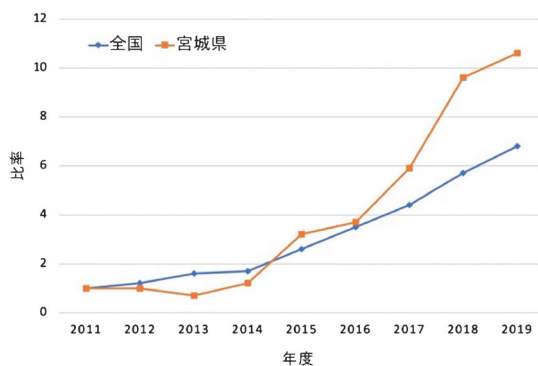


図1 宮城県と全国の小学校における暴力行為の年次推移（2011年度を1とした場合の各年度の比率を示す）

1. 宮城学院女子大学教育学部教授
2. 聖学院大学心理福祉学部教授
3. 東北福祉大学総合福祉学部講師
4. 東北学院大学教養学部教授

「震災後、親がアルコール依存症になった」、「DVや虐待が疑われる」などの葛藤の多い家族のなかで生活しており、震災による2次的、3次的な問題の影響を受けていたからである。そのことを反映するように、現場から我々に求められるスーパーバイズの内容は、「愛着障害」、「発達性トラウマ障害」など、虐待によるトラウマを扱ったテーマが多くなっている。

したがって、被災地における子どもの攻撃性への従来の発達臨床学的アプローチは、その問題行動の背景にある要因のアセスメントと、それに基づく子どもと家庭の個別の支援計画を保育士らと共に立案し、実施することであった。

一方、著者の一人である大橋<sup>4)</sup>は、特別支援学校の軽度知的障害児が、教師に向ける攻撃性の問題に直面していた。これらの子どもたちの多くは、上記の被災地の子ども同様、愛着形成の問題を抱えており、その問題によって生じる攻撃性を担任などの特定の教師に向けていたのである。また、教師の一部は、この攻撃性に対応できず機能不全の状態を呈していた。そこで、大橋は、7年におよぶ特別支援学校のスーパーバイズの経験に基づき、図2に示すEMADIS (Educational Model for the Attachment Disorders in the Special-Needs School) を提案した。このモデルは、投影性同一化<sup>5)</sup>を理論的根拠とし、愛着形成に問題を有する軽度知的障害児は、虐待してきた親(内的対象)を、選ばれた教師に投影し、その選ばれた教師は、虐待した親と同じように振る舞わされてしまう(かわいくない、腹が立ってしょうがない、無視したい、など)と仮定する。あるいは、虐待されて傷ついた自分(自己の一部)を選ばれた教師に投影することで、教師を無力な気持ちにさせたり、いつもおびえた気持ちにさせたりして、それを脅す、虐待する親の役割を愛着障害児が取ろうとすると仮定するのである。実際、大橋<sup>6)</sup>はこのモデルに基づき機能不全となっている教師に対して心理教育を行い、一定の成果を上げている。

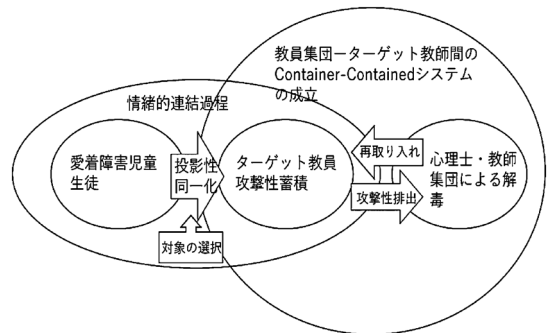


図2 EMADISモデル

以上のように、発達臨床心理学をベースとする足立<sup>3)</sup>は、高い攻撃性を有する子どもの家族機能の改善とその攻撃的行動の減少をねらいとするアプローチを取ったのに対して、精神分析学をベースとする大橋<sup>4,5)</sup>は、高い攻撃性を有する子どもと、その攻撃性の受け手である教師との関係性の変化をねらいとするアプローチを取ったのである。したがって、これら2つのアプローチを統合できるならば、より包括的に子どもの攻撃性への対応と子どもの攻撃性に巻き込まれる大人たちへの支援に大きく貢献できると考えられる。

そこで、本研究は、軽度知的障害児が教師に示す攻撃性の事例から導かれた大橋のEMADISモデルが、保育士に高い攻撃性を示す幼児への介入に適用可能かどうか、またそれが可能ならば、EMADISモデルに基づくアプローチと発達臨床学的アプローチをどのように統合すべきか検討を行うことを目的とする。

## II 事例

以下に保育士への攻撃性を示す3つの事例を記述する。これらの事例は、図2のEMADISモデルの検討に有益な情報をもたらす事例として選定した。なお、いずれの事例も、所属長の許可を得て掲載している。ただし、事例のプライバシー保護のため、家族状況は簡潔に記している。

### 【事例1】

本事例は、保育士への攻撃的言動が見られたA

児に対して著者の一人（以下、著者）が介入を行った事例である。

#### 1-1. 家族構成

父、母、A児（5歳児、男児）、弟

#### 1-2. 家族状況

父は転職が多く、経済的に不安である。A児は自宅においてスマホやタブレットなどのメディアに触れる時間が長い。送迎は主に母親が担当している。3歳児健診において言葉の遅れを指摘されているが、保護者はあまり気にせず、保健師による経過観察も行われていない。

#### 1-3. 介入の期間

期間：20XX年X月から20XX年X月+3カ月

#### 1-4. 開始時の問題の概要

保育士は、A児について声が大きく、いつでも喋っていて、静かにしていることを期待される場面でもできないこと、指示をしてもすぐに逸脱すること、次々と遊びが替わることなどについて保育の困難さを感じていた。このほか、集団遊びが苦手な自己主張が強く、紐通しやビーズ通しは得意であるが、箸の持ち方が不安定、汚れを気にしない、曖昧な表現が理解しづらいなどの特徴があった。

#### 1-5. 1回目のアセスメントと助言

20XX年X月：著者が保育室にてA児の行動観察を行う。午前の制作活動時、クラス担任が「折り紙」について一斉指示を行う。A児はすかさず「オレいやだ、やりたくない、できない」と騒ぎ出す。このとき、A児は担任のすぐそばに着席していた。しばらくして、クラス担任がA児から離れ他児のところに行ったあたりで、A児は「できた」と大きな声で叫び、クラス担任の注意をひいた。徐々にクラスが騒々しくなり、30分の観察中に子どもたちのケンカが10数件発生した。担任の眼が届かないところで叩き合うほどケンカをするもの、他児の物を隠すもの、大きな声で注意するものなどが現れだし、クラス担任は制作を進めることよりは、トラブルの仲裁で目いっぱいの様子であった。

A児について、担任にMEPAR（ムーブメント

教育療法プログラムアセスメント）を実施してもらった結果、運動感覚の姿勢について2から3歳程度、運動感覚の移動、運動感覚の技巧について1歳程度、言語受容と表出は1から2歳程度、社会性については、ほぼ年齢程度であるものの、ボール遊びの順番を待つことができる、友達と互いに主張したり、妥協したりして遊ぶ、ルールのある遊びを理解して遊べるといった、2歳下の項目（3、4歳児相当）において±（いつもはできない）が複数見られた。

行動観察では、始終クラス担任を独占したい様子、落ち着きのなさ、折り紙制作の指示が理解できない様子が目立った。仲間と協力せず、1人で行動している様子などから、自己主張の強さがうかがわれた。一方で、MEPARの結果から、対人関係の発達はおおよそ年齢相当であり、とくに運動感覚が未熟で、言語発達も未熟であることが分かった。ルールの理解、順番を待つ、主張と妥協といった対人関係の2歳程度未熟であることは、言語の未熟さと関連している可能性が示唆された。

これらから、落ち着きのなさやクラスでのトラブルの背景には、運動感覚と言語の未熟さがあると考えた。一方で、クラス担任を始終独占し、クラス担任の注意が他児に行くと、癩癩を起してクラス担任の注意をひくといった選択的で衝動的な行動から、クラス担任との愛着形成にも課題があると考えた。

1回目の助言：まず著者は、クラス担任のこれまでの保育や努力を労った。これにより、クラス担任の自己有能感が回復し、著者との間に作業同盟が構築されたようであった。A児への対応の助言としては、身体から言語の順に発達するので、まずは運動感覚の発達を促すように助言した。具体的には、午前中の外遊び等において鉄棒にぶら下がるなど、体幹を鍛えるような遊びの取入れを助言した。

愛着の形成不全は、認知機能等の発達を阻害する可能性がある<sup>7)</sup>。そこで、言語発達の未熟さや対人関係の未熟な部分が愛着の形成不全なのか、慢性的な器質的問題によるものかを確認するため

に、クラス担任とA児間に愛着の形成を促すように指示した。

具体的には、A児は愛着の対象をクラス担任に選択しているが、その対象を攻撃していることから、愛着形成の基本的能力があり、保育士との信頼関係はできていること、安定した愛着が形成されると、クラス担任が同じ空間にいれば、一人で遊ぶことができるようになり、やがて探索行動が見られることを伝えた。

一方で、攻撃的な行動について、完全に無視したり過度に叱りすぎたりすると、安全基地としてのクラス担任を不安になり、安定した愛着が形成できないことを伝えた。さらに、今ここでの体験を重視するため、叱った場合には、次の時間に持ち込まないこと、あまり長く叱らないことも付け加えた。

そのほかに、実行系の発達を促すため、自分のしたい遊びを何分行うかを、A児およびクラスの幼児のそれぞれに決めさせる（自己決定の経験）ことや、感情の言語化を支援することを提案した。

#### 1-6. 2回目のアセスメントと結果

20XX年X月+3カ月：クラス担任は、クラスを2つに分け、保育室前方で制作活動をするものと、後方でブロック遊びなど好きな遊びをするものとに分けていた。また、ストップウォッチをつかって、自分がしたい遊びをどのくらいの時間行うか設定させる取り組みが導入されていた（5、7、10分から選んで設定する）。ストップウォッチの取り組みによって、クラス担任は、事例の子どもも含め、クラスの子どもの切り替えが良くなったと感じていた（選択と実行の実施）。

A児は、保育室の後ろのスペースでブロック遊びを行っていた。するとA児は他児にケンカをしかけ始めた。著者が床に座って観察していると、すり寄ってきて膝の上に寝転がった。「安心して？」と聞くと、恥ずかしそうに「うん」と答えた。ほぼ初対面の著者に、身体接触を求めてきたのだ。A児がおとなしくなったので、著者が、「好きなものなーに？」と聞くと、A児は「きらいなものは」とかえしてきた。著者は「嫌いなもの

のでもいいんだよ」と返すと、安心した様子で著者から離れた。A児はブロックで制作をはじめ、複雑で精巧な剣を作った。著者が「かっこいいね、いいなあ」というとA児は「せんせいにもつくるね」と笑顔で言い作ってくれた。著者の剣が完成すると、A児は著者に渡した。著者が「ありがとう、今どんな気持ち？」という、A児は「うれしいきもち」といった。著者も「先生もうれしいよ」といってその場を閉じた。

MEPARの結果、運動感覚の姿勢、移動、技巧は1歳程度の遅れまで発達し、言語についても土あるものの、1歳程度の遅れまで改善した。社会性については、ボール遊びの順番を待つことができる、友達と互いに主張したり、妥協したりして遊ぶ、ルールのある遊びを理解して遊べるといった、2歳下の項目（3、4歳児相当）も改善した。クラス担任の印象も、出来ることが増え、いつもではないが、落ち着いてきた印象があるとのことで、介入開始時よりも負担感が低減した様子であった。

#### 1-7. EMADISモデルに基づく本事例の検討

この介入事例は、対象児の行動観察と発達検査によるアセスメントを行い、その結果に基づいて助言を行ったものであり、オーソドックスな発達臨床学的アプローチに基づくものであった。また、対象児は、選択的に担任保育士を攻撃している点で、EMADISモデルと外形上符合するものであった。

この事例における保育士への攻撃は、対象児の抱える苦痛や不安を投影性同一化によって伝えようとしており愛着対象が安全基地として頑丈かを確認する心の作業であったと推察される。

また、対象児の保育士への愛着が不安定であった理由は、対象児の発達特性により愛着形成能力が未熟であったこと、また、愛着の対象となるべき保育士が、気になる子どもが多いクラスの中で不安定となっていたことが考えられる。したがって、保育士に攻撃性を示す幼児への介入においては、EMADISモデルを念頭に置きながら、対象児の発達のアセスメントと保育士との愛着水準のアセスメントを同時に行うことが必要であると判断



される。

## 【事例2】

本事例は、保育士への激しい攻撃的言動と解離が見られたB児に対して保育士が的確な対応を行った事例である。

### 2-1. 家族構成

父、母、兄（中学1年）、B児（5歳男児）。

### 2-2. 家族状況

母親はB児が2歳から3歳の時に体調を崩し、休職状態となっていた。また、その間、父親が本児の送迎を担当することが多かった。母親はB児の育児に一貫して困難さを感じており、送迎の際にB児に対して冷たい態度を取ることがあった。保育士に対しても素っ気ない態度を示すことがあり、信頼関係を構築していくことが難しかった。

兄は小学校高学年頃から不登校の状態であったが、中学入学直後から家で暴れることが多くなった。また、B児に対して、たびたび「死ぬ、消えろ」などの暴言を吐くようであった。

### 2-3. B児の園での様子

1歳児より入園。気質的に難しいところがあり、新しい場面、人、物に慣れにくく、ちょっとした変化に敏感に反応することがあった。加えて、衝動的で多動な傾向があり、気になる子として園では対応を行っていた。年長になり、兄が家庭で暴れ始めた頃から、園での不適応が著しくなった。

具体的には、他児とのトラブルが増加し、自分の思い通りにならないと一方的に他児を責めたり（「おまえがわるい」、「おまえとはあそばない」等）、相手をイライラさせたりした（「おこりたいんだろ、ほーらおこれ！」等）。また、保育士に対して、「しね、きえろ」などの暴言を吐き、叩く、蹴るなどの暴力を振るった。

### 2-4. 内科検診時の激しい攻撃的言動のエピソード

自分の順番になると大暴れし、園医の眼鏡を手で払う。手がつけれなくなり、担任保育士が保育室に戻そうとすると廊下で叩く、蹴るなど激しく抵抗した。その騒ぎに気づいた副担の保育士が本児をホールに誘い、落ちつかそうとした。しか

し、怒りは収まらず、「あいつをズタズタにきってやる！」と身を震わせた。本来であれば、そのような暴言を注意するところだが、副担の保育士はB児が自分自身に怖れを感じていると咄嗟に判断し、「マットに隠れて！」とB児をマットに潜り込ませた（保育士もマットに隠れる）。ちょうどその時、内科検診が終わり外で遊んでいたB児のクラスの子ども数人がその姿に気づき、ホールの窓を外からトントンと叩いた。B児はその音に怯え、ピクリとも動かなかった。数分が経つだろうか、保育士は本児の死んだように動かない姿に心配となり、恐る恐る「Bくん、怖かったね」と声をかけた。すると、B児はマットから這いだし、「おれ、（園医に）あやまってくる」と別人のように穏やかに話した。

### 2-5. 絵本を読み聞かせた際の解離のエピソード

登園直後から落ち着かないB児。中心となる活動の時間も落ちつかず、他児の邪魔をしているB児を担当保育士が注意すると、担任を叩き大暴れをした。やむを得ず、副担の保育士がB児を隣の誰もいない保育室に連れて行った。そして、B児が好みそうな絵本を選択し、『はじめてのおつかい』（筒井頼子著、福音館書店）を読んだ。B児は保育士の膝に座り、じっと聞き入っていた。保育士が読み終えたところで、B児に「いつものBちゃんは戻った？」と尋ねると、「ソランくんのこと？」とB児が答える。保育士が「ソランくん、だあれ？」と尋ねると、B児は少し微笑んで「やさしいソランくん」と答える。保育士は、このままB児を保育室に戻しても良いだろうか？と迷い、「B児も、ソランくんも一緒だね」と両手でB児の肩から腕を包み込むように軽く押さえた（あたかも二人の人物を一つに束ねるように）。B児は何もなかったかのように、穏やかに自分の保育室に戻った。

### 2-6. EMADISモデルに基づく本事例の検討

対象児は、内科検診のエピソードにあるように、たびたび大暴れをし、手が付けられない状態となることが多かった。その際、「ほうちょうですす」、「ずたずたにきってやる」など年齢に相応しくな

い過激な言葉を使っていた。このようなパニック状態を度々起こすようになったのは、兄が家庭で暴れ始めた時期に重なっており、兄の像を自分の中に取り入れた結果と考えられる。その点で、EMADISモデルによる投影性同一化のメカニズムが対象児においても働いていた可能性が考えられる。

内科検診のエピソードでは、自分の中に抑えられない恐怖を感じている対象児の心の動きを保育士が察し、咄嗟にマットに隠れさせたのは、この恐怖から対象児を解放するのに極めて有効な対応であったと考えられる。すなわち、保育士の「隠れて」の言葉と、共に隠れることにつき合ってくれる保育士がいることは、安全に本来の怖がっている自分であることを許してくれたと推察される。そのことにより、自分に取り入れていた兄の像を、保育士が与える安全感の中で吐き出すことができたのである。

保育士がこのような優れた対応を行った理由には、この保育所では対象児の保育のあり方について心理士を交えて繰り返しケース会議がもたれており、EMADISモデルが示す「保育士集団とターゲット保育士間のContainer-Containedシステム」が成立していたためとも考えられる。

また、絵本のエピソードでは、やはり大暴れをした対象児に個別の対応を行い、静かに絵本を読み聞かせた。絵本そのものの力があつたと考えられるが、本児はこの絵本の世界に引き込まれ、大暴れをする自分から本来の自分を取り戻した。それに気づいた保育士が、絶妙のタイミングで「いつものB君は戻った？」と声を掛けたのに対して、対象児は「ソランくんのこと？」と応じている。対象児は、繰り返す解離の体験の中で、本来の自分を対象化し、自分を見失わないようにしていたのではないかと推察される。さらに、このエピソードの最後に、保育士が「B君も、ソランくんも一緒だね」と、2つの人格を束ねるような言葉がけを行ったことは、本児の自我を安定させる意味でとても重要な対応であったと考えられる。

これら2つのエピソードは、怒りに我を忘れた

対象児を遊びの文脈に持ち込み、対象児の不安の処理と安心感の構築を可能とするものであった。これらの事例は、EMADISモデルの臨床的妥当性と応用性を支持するものである。

### 【事例3】

本事例は、保育士への激しい攻撃的言動により保育士がパニック障害の症状を呈したC児の事例である。

#### 3-1. 家族構成

母、祖母、C児（5歳、男児）

#### 3-2. 家族状況

夫のDVにより離婚、3歳の時に他県より転居し保育所に入園した。家計は祖母に頼っており、C児の送迎も祖母が担当していた。

#### 3-3. C児の園での様子

入園時より、突然友達を押す、倒す、引っ掻く等が頻発した。落ち着きがなく、遊びが転々としており、いきなり大声で叫ぶ一方で、ぼーとしていたことがあつた。保育士に対して「しね」、「きえろ」などの暴言を吐くことがあつた。

#### 3-4. 担任保育士のエピソード

C児が在籍する5歳児のクラスは、保育士になって3年目の若い担任が一人で担当した。5月連休明け頃から保育士は体調を崩し始め、6月に入り休みがちとなった。心配した園長が保育士と面談したところ、かかりつけ医にパニック障害と診断され、服薬していることを告げられた。園長は、服薬するまで精神的に追い詰められていたことを謝罪し、保育士を1か月間、休ませることとした。しかし、生真面目な保育士は、長期間休職することを躊躇し、1週間の休みの後、担任を外れ職員室で事務仕事をする事となった。

職員室で仕事をする事になった保育士は、体調を取り戻し精神的にも安定を取り戻した。そのようなある日、保育士は園長に自分の生育歴を話した。それは、幼少期から思春期にわたって、家庭内でDVを目撃したエピソードであった。また、C児を担当し、毎日、C児から罵声を浴びることで、DVを目撃していた当時を思い出し、強い不

安と発汗の症状を呈したこと、保育室に入ることが怖くなったことを話した。

### 3-5. EMADISモデルに基づく本事例の検討

この事例においては、対象児と保育士の保育中のトラブルについては、具体的なエピソードを得ることができなかった。しかし、対象児の生育歴や入園後の対象児の言動から、対象児が愛着形成に課題を有していたことは容易に想定された。また、C児の攻撃の対象となった保育士のエピソードから、EMADISモデルの以下の仮説、すなわち、「虐待されて傷ついた自分（自己の一部）を選ばれた教師に投影することで、教師を無力な気持ちにさせたり、いつもおびえた気持ちにさせたりして、それを脅す、虐待する親の役割を愛着障害児が取ろうとする」ことが文字通り生じていたことが確認された。この事例は、EMADISモデルの臨床的妥当性を強く支持するものであり、このモデルが示すような事態が生じた場合には、対象児のターゲットとなった保育士（あるいは教師）の生育歴についてもいち早くアセスメントをし、対象化された保育士が休職に追い込まれないような介入が望まれる。

## III 結論

本研究は、愛着に課題を有する児童が、投影性同一化のメカニズムによって教師に高い攻撃性を示す事例から導かれたEMADISモデル<sup>4)</sup>が、保育士に高い攻撃性を示す幼児への介入に適用可能かどうか、またそれが可能ならば、EMADISモデルに基づくアプローチと発達臨床学的方法をどのように統合すべきか検討を行うことを目的とした。

事例1の対象児は、家庭において虐待などの著しく不適切な養育は把握されていないが、運動・言語領域を中心に発達の遅れが見られた。また、対象児が在籍するクラスは大変荒れており、保育士も不安定であった。したがって、対象児が保育士に向けた攻撃性は、愛着対象が安全基地として頑丈か確認する心の作業として解釈された。この事例は、EMADISモデルのうち、対象児がター

ゲット教員に向ける投影性同一化の強度が、二者間に形成される愛着水準と負の相関関係にあることを示唆し、EMADISモデルを念頭に置きながら、対象児の発達アセスメントと保育士との愛着水準のアセスメントを継続して行うことが必要であると判断された。

事例2の対象児は、保育士に対して「しね、きえろ」などの暴言を吐き、叩く、蹴るなどの暴力をたびたび振るうことがあった。このような著しい攻撃性は、家庭で本児に対して暴言を吐く兄の存在が仮定され、兄の像を自分の中に取り入れた結果と考えられた。その点で、EMADISモデルによる投影性同一化のメカニズムが対象児においても働いていた可能性が考えられた。また、この事例が報告された保育所では、対象児に関するケース会議が心理士を交えてもたれており、保育士集団とターゲット保育士間のContainer-Containedシステムが成立していたことが示唆された。

事例3は、対象児から攻撃を受けた保育士がパニック障害の症状を呈した深刻な事例であった。その背景には、保育士が生育歴において両親のDVを目撃しており、愛着に課題を有する攻撃的言動にもともと脆弱性を有していたと推察された。対象児自身も両親のDVを目撃しており、EMADISモデルを強く支持する結果であった。

以上のように、家庭においてDVを目撃したり、家族からの暴力の対象となった幼児が示す攻撃性は、EMADISモデルによって説明される可能性が高いことが明らかとなった。また、EMADISモデルが仮定するContainer-Containedシステムの有効性も、幼児を対象とした保育所の事例で明らかとなった。

したがって、軽度知的障害を有する特別支援学校の児童のケースから導かれたEMADISモデルは、保育所の幼児の事例においても適用可能であると結論される。また、EMADISモデルの中に、幼児の発達アセスメントや幼児と保育士との愛着水準のアセスメントを行うモジュールをこのモデルに実装するならば、このモデルの臨床的応用性がさらに高まるものと結論された。

## 文献

- 1) 文部科学省 (2020) 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm) (2021 年 1 月 15 日)
- 2) 柴田理瑛・平野幹雄・西浦和樹・足立智昭 (2018) 保育・教育現場における子どもの攻撃性とその対応について. 宮城学院女子大学発達科学研究, 18, 77-80.
- 3) 足立智昭 (2018) 震災を生きる: ト라우マや PTSD とともに地域で生きるために (川島大輔他編『多様な人生のかたちを迫る発達心理学』ナカニシヤ出版.
- 4) 大橋良枝 (2017) 知的特別支援学校の混乱に対する臨床介入モデルの精神分析的検討 (1) 一愛着障害児の投影性同一化と教師の孤立一. 聖学院大学論叢, 30 (1) 65-81.
- 5) Ogden, T. H. (1979). On projective identification. *International Journal of Psycho-Analysis*, 60, 357-373.
- 6) 大橋良枝 (2018) 愛着障害児に対応する知的特別支援教師の Negative Capability 支援の重要性と自我心理学的視点の有用性の検討. 聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER, 27, 1.
- 7) Strathearn, L., Fonagy, P., Amico, J., & Montague, P. R. (2009). Adult attachment predicts maternal brain and oxytocin response to infant cues. *Neuropsychopharmacology*, 34 (13), 2655-2666.

## 謝辞

本研究はJSPS科研費 19K03261の助成を受けたものです。